

平成28年度 教育課程Q & A

◆実践提案「コロコロえんにちを ひらこう」について

Q 1 同学年の他クラスも、同じように商店街とかかわったのでしょうか。また、行きたい店はどのように決めたのでしょうか。

A 1 提案校については、学級ごとの取組ですので、商店街を学習対象としない学級もあります。本学級の子どもたちは、何度も同じ店を探検するよさを感じてお店に詳しくなれること、お店の人と顔見知りになれることから「ミニ店員さんみたいって言われるかも」となり、このお店のミニ店員さんになりたいと、子どもがかかわりたいお店を決めていきました。

しかしながら、学校によっては、その事情から、学年としてかかわりながら学習を進めていくこともあるかと思います。学年内で、子どもの実態を把握しつつ、単元を構想していくことが大切です。また、先方との調整や子どもの安全確保などの面での打ち合わせや計画を丁寧にしておくことも欠かせません。

Q 2 1年生のとき、また今年度は、どのような活動をしているのでしょうか。

A 2 1年生の時は、内容（1）（2）（5）（7）（8）（9）をどのクラスも扱いました。材はそれぞれです。八百屋さんから発砲スチロールをもらって一人ひとり野菜を育てたり、学校の草花で遊んだり、川で遊んだり、ザリガニを育てたり、学校の中に遊び場をつくったりする等、それぞれのクラスで学びを創ってきました。

今年度3年生になった子どもたちは、「小豆、どら焼き」「お囃子」「寄席」とそれぞれのクラスで学びを創っています。

Q 3 集団作りの点から、普段の授業や生活において大切にしてきたこと、必ず身に付けてきたことなどは、どんなことでしょうか。

A 3 学級づくりとして、スタートカリキュラムでも大切にしている「お話ししよう」の時間（好きなものやテーマについて話し、自然な会話を楽しむ雰囲気を作っていく時間）は、最初のころ大切にしました。

生活科では、同じ意見でも「Aさんはそう思ったのですね。」「色々なアドバイスが出たけれどBさんはどうしたいですか」と一人ひとりのかかわりを大切にして問い返したり声をかけたりして、色々なかかわり方が生まれるようにしています。一人ひとりが自分のかかわりが認められて、友達のかかわりにも心を向けるようになるように意識して価値付けています。

Q 4 育てたい力は同じであっても、個人やクラスによって、活動が変わってくると思うが、それでよいのでしょうか。(保護者への説明)

また、きっかけを見つけたとき、子どもにどのような声かけをすると、育てたい姿につながるのでしょうか。

A 4 その活動をする(させる)ことが生活科のねらいではなく、〇〇という学習材で、△△という活動を通して、どのような資質・能力を發揮できるようにしたり、身に付けたりすることができるようにしていくのが大切になります。

そのような視点での授業づくりをしていくこと、学習場面での子どもの育ちについて保護者へ発信し、何をしているのかではなく、どのような力が身に付いて(付けて)いるのかを具体的な子どもの姿で伝えることも大切です。

育てたい姿を山の頂上としてみます。登山ルートはいくつもあります。異なる活動をしていても、学年として育てたい姿は同じ、(異なるルートを通っても、たどり着く頂上は同じ)ということを学年懇談会で保護者に伝えるようにしている学校もあります。

子どもへの声かけですが、まず、教師が、単元を通して子どもたちにかかわってほしい学習対象についての教材研究をすることが大切です。子どもが思いや願いを実現していく学習過程において、学習活動や体験と表現活動が相互作用しながら、活動を広げたり深めたりできるか、その中で、どのような力を發揮し、身に付けていかれるかについて、目の前の子どもをイメージし、見通していきます。

教師が、子どもの学びのストーリーを描きながら、声かけや問い返しなどの手立て、指導の計画を立てていきましょう。

Q 5 子どもの思いをすべて見とっていくためには、どのようにしたらよいのでしょうか。

A 5 生活科の学習のみで見取って行くことは難しく、また、低学年であることを踏まえると馴染まない部分もあります。まず、単元を通して育てたい資質・能力を見取って行くための評価規準をした上で、学習過程の中で、どのように変容したり、かわりを深めたりしたかなどについて、単元全体を通して「長い目」で、しかも共感的に「あたたかい目」で見取ること、他の教職員・保護者等からの話など、担任以外からの「広い目」で見取ることが大切です。

給食や休み時間などの子どもたちとの会話から、授業で見えなかった子どもの思いを知ることもできます。また、放課後キッズクラブやはまっこふれあいスクール、学童クラブの職員の方や、見守り隊などとの情報交換も見取りに生かされます。

Q 6 地域に出る際、校内や保護者の協力をどのようにして得ているのでしょうか。また、担任が事前にどのような準備をすると、スムーズに行えるでしょうか。

A 6 まず担任が、地域に出てどういう力を子どもに身に付けたいかを明確にします。担任自身に地域に出る必要感がしっかりあり、担任としてその必要感をクリアするためにどのような協力が必要かというプランをもって、学年そして管理職と相談することが前提です。そして、担任自身が地域にでてみて、価値や問題点を整理しておくといいです。必要感があれば、「学援隊」や学校独自の保護者・地域の協力組織を活用する学校、学級や学年の保護者、地域コーディネーター等に協力を要請する道筋を、学校としても担任と共に考えていきやすくなります。

安全配慮、確保の観点から、学校長が把握していなければなりませんので、その壁をのりこえる準備を担任や学年がしておく、道は開けてくると思います。

◆評価規準について

Q 7 評価規準は、どのように書けばよいのでしょうか。

A 7 国立教育政策研究所発行の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（平成 23 年 11 月）」を活用します。

(URL <http://www.nier.go.jp//kaihatsu/shidousiryoku.html>)

指導内容を盛り込んだ単元構想ができ、単元目標も含めて指導計画が作成できたら、それぞれの小単元において、主にどの指導内容についての力を身に付けられるようにしたいのかを明確にし、「参考資料」にある「評価規準の設定例」から、単元に合わせた具体に落とししていきます。3 観点の内、どの観点について育てたい小単元なのかを踏まえることが大切です。

◆具体の 3 事例について

Q 8 アサガオではないものを育てていること、モルモットを飼うことについて、保護者へどう説明したのでしょうか。また、モルモットを飼いたくない子どもの思いは、どのようにマネジメントしていくのでしょうか。

A 8 A 4 にもあるように、学習対象とのかかわりの中で、どのように資質・能力を発揮し、身に付けているかを見取り、保護者にも説明していくことが大切です。

「モルモットを飼いたくない」子どもについては、担任や学級全員で説き伏せてしまうのではなく、理由や背景等に寄り添いつつ、家庭とも連携しながら、共に取り組んでいかれることを一緒に探っていくような支援が必要です。

また、単元に入る前の段階での、実態把握や動機づけも大切にし、子どもが無理なく思いをもったり、学習対象と出会ったりすることができるような教師の構えや見通しをもつことが大切です。

実践校では、モルモットを飼うことについて、懇談会のときに説明をしました。子どもたちの思いがあること、それをどのように乗り越えていっているのかということ話し、生活科の学習として飼育動物の命と向き合う学習を進めたいという担任の思いも併せて話しました。何度も校長先生に相談に行っていることを子どもたちは家庭で話したり、モルモットについて分からないことをおうちの人に聞いたりしていたので、子どもたちが主体的に学びに向かっている姿を、家庭でも認めていただきました。モルモットを飼いたくないという子については、思いをくみとり、その子の思いがモルモットに向かうまで待ちました。他の子どもたちの話を聞いたり、家庭でモルモットについて話したりすることで少しずつモルモットに向いていきました。

栽培学習についても、保護者には事前に懇談会や面談等の折りに、自校における1年生の生活科のあり方や学力観、子どもたちの育ち、めざす姿などを丁寧に説明し、また、子どもたちがどのような学習の過程を通ってきたのかを見えるようにしてきました。

また、個別に家庭へ連絡をとりながら子どものよさや考えている事など、教師が見取ったことを伝えていき、共に子どもを見守り育てていくようにしてきました。

Q 9 小動物を学級で飼うことになったとき、どのようにして手に入れるのでしょうか。また、学習の終わりや次の学年になったとき、どうしたらよいのでしょうか。

A 9 通常、学校の公費で手に入れることが多いかと思います。

できることならば、年度初めに見通しをもって単元を構成し、予算委員会にかけて財源を確保しておくのがよいと思います。

実践校では、「1年生みんなのモルモット」として認識し、学年が上がったときもそのまま「2年生のモルモット」として世話を続けました。今後は、学校探検などを通して自然なかたちで1年生とモルモットが会う機会をつくり、1年生へと引継いでいけるように、1年担任と連携しています。

命とかかわる学習ですので、学習の終わりや次の学年まで、子どもがどのように資質・能力を発揮し、身に付けながら学んでいくか、子どもの実態を踏まえて事前に構想すること、つまり、カリキュラム・マネジメントすることが、まず大切です。

Q10 3事例の時数はどのように設定しているのでしょうか。

A10 生き物の学習について、実践校での実際の流れは、次の通りです。

いきものの せわをしよう！

がっこうには、どんないきものがいるのかな（1時間）+常時活動

- ・クワガタやカタツムリを見つけたよ。
- ・飼育小屋にはうさぎがいるよ。さわらせてもらったよ。
- ・他のクラスでは、何か飼っているのかな。

うさぎと なかよくなりたいな（3時間）+常時活動

- ・うさぎをだっこしたいな。
- ・うさぎのことを、みんなに伝えたいな。
- ・1年1組でも、生き物を飼ってみたいな。どんな生き物なら飼えるかな。

じぶんたちでも かってみたいな（4時間）+常時活動

- ・うさぎが飼えるかどうか、校長先生に相談してみよう。
- ・どうしたらいいって言ってくれるかな。
- ・どこで飼うのがいちばんいいかな。
- ・えさはどうしようか。
- ・居心地のよいすみかをみんなで相談しよう。

もっと なかよくなりたいな（4時間）+常時活動

- ・上手に世話ができるようになってうれしいな。
- ・喜んでくれるふれあい方を発見したよ。
- ・わかったこと、みんなに伝えよう。
- ・これからも、なかよくしたいな。

モルモットとふれあうって、たのしいね。
モルモットにもくらしやすいところがあるんだね。
じぶんも、ともだちも、いきものも、いのちをたいせつにしたいな。

常時活動で、モルモットに心を寄せられるよう、繰り返し触れ合うようにしました。

ギター教室の先生とのかかわりは、町たんけんの中の一部です。したがって、40時間ほどの町たんけんの中でも、授業時数として計上したのは5時間ほどです。野菜を届けたり、先生が見守ったりしてくれたミニ交流のようなかかわりは、放課後や休み時間などの活動なので、実際の授業時数には含まれていません。

栽培の学習は、時数はある程度、事前に設定した学校のカリキュラムに準じていますが、子どもの思いや願いによって活動内容や活動時間が前後してきます。学習指導要領に示された必要時間数（生活科の時間数）は確保しつつ、柔軟に対応しています。

◆ **スタートカリキュラムについて**

Q11 「朝の時間」は、いつくらいまで、独自の動きをするのでしょうか。

A11 子どもの実態によって違うと思いますが、週案例にあるように、2週間程度設定し、子どもたちが安心して自己発揮できるようになっているか見極めることが大切です。その後は、読書タイムや集会など学校で取り組んでいるものに徐々に移行していくとよいです。

Q12 自由な時間を「朝の時間」に入れることは必要なのでしょうか。幼稚園、保育園の流れに合わせ不安を解いていくとのことだが、「小学校らしさ」は、いつ教えていけばよいのでしょうか。

A12 今回、登校した子どもが好きな活動を自分で選ぶ 朝の時間の設定を提案させていただきました。子どもたちが、自分で考えて自分で行動できる、この時間は、子どもたちだけでなく教師にとっても、ゆったりスタートできていいという声を推進地区などで取り組んでいる学校から聞いております。その場合、朝の打ち合わせは、1学年の代表が参加し、打合せ終了後、メモをもとに学年の先生に伝えるなどして、担任が教室にいられるような工夫をしています。また、6年生が一緒に朝の時間を過ごす取り組みをしている地区もあります。

年長の時は、一番年上として自信をもって生活していた子どもたちです。「小学校でも、園の時のように自分を出してよいのだ」と子ども自身が思うことができれば、自然と小学生らしくなってくると考えます。そのためにも、まずは、安心して自己発揮できる居場所づくりが大切になります。

Q13 学校生活のルール（廊下の歩き方、ロッカーの使い方など）のようなことは、「何タイム」であり、どのように組み込んでいくとよいのでしょうか。

A13 何タイムでやるという規定はありません。たとえば「わくわくタイム」で探検に行く前に、みんなで約束を決めようというときに、活動の中で学べるとよいで

すね。

例「廊下は静かに歩いた方がいいよ。」

「なんでそう思ったの？」

「だって、お勉強しているお兄さんお姉さんがうるさいと困るでしょ。」

ロッカーの使い方については、使い方を写真などで示し可視化しておく場合や子どもたちがいろいろな方法で入れているロッカーを朝の会の時にみんなで見て、どういう使い方がいいかなと話し合いながら解決していく場合などいろいろな考えられます。

いずれも、適応指導として生活上のことを教え込んでいくのではなく、活動の中で必要な技能等を子ども自身が学べるようにすることが大切です。

Q14 「お話ししよう」は、全員でやろうとすると、子どもは飽きてしまいました。どのような工夫すればよいでしょうか。

A14 例えば、質問は一つに限定するとか、今日は、一号車のみんながお話するとうように人数を限定するとか、いろいろな方法があります。子どもの状況を見て判断してみてください。

Q15 「なかよしタイム」の時数上の制限について、どのように捉えるとよいのでしょうか。

A15 一年生は、年間の時数は34週で計算されています。他学年は35週です。学校で計画した年間指導時数から文科省で定めている年間授業時数を引いた余剰時数の中から、どれだけ「なかよし」に充てるかは各学校で定めることとなります。

まずは、2週間の週案の中で、計画を立ててみてください。